

レギーネと間接伝達

國井 哲義

はじめに

現代社会は「情報化社会」であると言われている。通信ケーブル、通信衛星、コンピュータのネットワークなどを介して、さまざまな情報が、文字通り光の速さで地球の隅々まで伝えられている。このような状況のなかで、「何を伝達するか」ということは問題にされても、「伝達とは何か」とか、「伝達するとはどういうことか」というようなことが問われることはほとんどないように思われる。

キエルケゴールが生涯にわたって問いつづけたことは、「伝達するとはどういうことか」であった。つまり彼は、何を伝達するかではなく、伝達そのものを問題としたのである。

彼は日誌（一八四七年）に次のように書いている。

「しかしまた、私はあらゆるところで、人が取り組んでいるのは、何が伝達されるべきかという問題であることを見いだす。ところがこれに反して、私が取り組んでいることは、伝達するとはどういうことかという問題であって、この問題に関しては、私は現代の書物のなかでは、ほんのわずかのことさえ読んだ覚えはなく、またそれについてだれかが語るのを聞いた覚えもない。ただずっと大昔にかえることによってはじ

めて、すなわち実質的にギリシヤで、かつて人がこの問題に取り組んだことがあると
 「ふじつに返すのである。」(Pap. VII 2 B 89 S. 185)⁽¹⁾

伝達の問題に関しては、キエルケゴールの生きた時代も、情況は現代と変わらなかったのである。問題とされたことは「何が伝達されるべきか」であって、「伝達するとはどういうことか」ではなかったのだ。人類の歴史のなかで、伝達そのものが問われたことはほとんどなかったのである。ただ古代ギリシヤで伝達の問題に取り組んだ人物がいたと書かれているが、それはソクラテスのことであろう。ソクラテスこそ、キエルケゴールに伝達の問題を考えるきっかけを与えた人物の一人だったのである。(拙著『苦悩と愛——キエルケゴール論』、創言社、三八頁以下参照)

しかし、彼に、この問題を考える最初の、そして最大のきっかけを与えた人物は、レギーネ・オルセン(Regine Olsen, 1823-1904)だったのでなからうか。本稿の目的は、キエルケゴールが生涯にわたって愛しつづけたただ一人の女性であるレギーネとの出会いと別れを通して、彼がどのようにして伝達の問題を深く考えるきっかけを与えられたか、さらにはそこで練り上げられた思想が、どのようにして彼のキリスト教解釈の重要な柱となっていくかを考察することである。

一、レギーネとの出会いと別れ

キエルケゴールは、一八三七年五月、青年会の集まりでたまたま訪れたボレット・レアダムという女性の家で、そこに居合わせたレギーネ・オルセンと出会い、たちまち彼女を熱愛するようになる。時にキエルケゴール二十四歳、レギーネはまだ十四歳の少女であった。

彼は一八四〇年の夏、神学の国家試験に通り、父親ミカエルの生まれ育ったセディングに旅をしている。おそらくこの旅は、キエルケゴールの家族の発祥の地であり、父ミカエルが神を呪うという重大な罪を犯した地でもあるセディングで、レギーネとの結婚が本当に可能かどうかについて神の声を聴き、気持ちを整理するためのものだったのであろう。

彼は八月、旅先から帰ってくる。そして九月八日、レギーネに結婚を申し込む。彼はこのときのことを「彼女 に対する私の関係」(一八四九年八月二四日付)という手記のなかで次のように書いている。

「九月八日、私はすべてに決着をつけようと固く決意して家を出た。われわれはちょうど彼女の家の前の路上で出会った。彼女は、家にはだれもおりません、と言った。私は向こう見ずにも、これこそ自分に必要な誘いだと思った。私は一緒に家にあがった。居間にいるのはわれわれ二人だけだった。彼女は幾分落着きがなかった。私はいつものようにピアノを少し弾いてくれるように頼んだ。彼女はピアノを弾く、しかしどうもうまくゆかない。突然私は楽譜を取りあげると、それをかなり激しく閉じてピアノから投げ捨て、そして言う、ああ、音楽のことなどどうでもよいのです。私が求めているのはあなたなのだ、私は二年間あなたを求めつづけていたのです。彼女は黙っていた。それ以外には、私は彼女の心を奪うようなことは何もしなかった。むしろ私は、私自身に、私の憂愁に用心するように警告すらした。それから彼女がスレーゲルとの関係を口にしたので、私は言った、それではその関係は括弧に入れておきなさい、なんといいても私に優先権があるのだから。」(Pap. X 5 A 149, 5)

キエルケゴールがレギーネに結婚を申し込んだときの様子はこのようなものであった。ここで注目すべきことは、彼が愛を告白した直後に、すでに彼の憂愁に用心するように警告していることである。彼は当初から、自分の憂愁が結婚の障害になるのではないかとの懸念を抱いていたのである。文中にスレーゲルという名前が登場しているが、それはフリッツ・スレーゲル (Johan Frederik [Fritz] Schlegel, 1817-1896) のことである。彼はレギーネの学校時代の教師であり、彼女に好意を寄せていた。ちなみに、彼は後にレギーネと結婚し、西インド諸島総督、市長、知事、枢密顧問官などの要職を歴任することになる。

レギーネは、キエルケゴールの愛の告白に対して、お互いに好意を寄せ合っているスレーゲルのことを口にしたのだが、キエルケゴールはそのことを保留しておくように求めたわけである。この二日後の九月十日、彼は彼女から結婚の承諾を得る。しかしなんとということであろう、この直後、彼は深い後悔の念に襲われているのである。

「しかし内面では、その次の日に、私は過ちを犯したのだとついついことがわかった。私のよつな悔悟者、私の従前の経歴 (vita ante acta)、私の憂愁、それだけでもう十分だった。私はその頃、書き表せないほど苦しんだ。」 (Pap. X 5 A 149, 5)

キエルケゴールはここで、「悔悟者」、「従前の経歴」、「憂愁」などの理由を挙げているが、ともかくこの結婚が過ちであるとの思いを押さえることができなかつたのである。ついに彼は手紙を書いて指輪を送り返し、婚約を破棄する。二人の婚約は十三ヶ月間ほどであった。

ちなみにレギーネは、四三年にスレーゲルと婚約、四七年には結婚し、幸せな生活を送ったとい

う。(大谷長訳編、『婚約——セーレン・キエルケゴールの遺稿』、創言社、参照)

二、婚約破棄の本当の理由

キエルケゴールはなぜ婚約を破棄したのであろうか。今さらこのような問いを提出すること自体が奇妙に思われるかもしれない。われわれはすでに、彼が「悔悟者」、「従前の経歴」、「憂愁」などを理由として挙げたのを見てきたからである。

しかし、彼は、日誌のなかでさえ、個別的な事柄に関しては具体的内容を明らかにしないのを常としており、彼の挙げた理由の内容が依然として不明であるとしても、われわれはそれらが、本当に最愛の女性と別れねばならないほどのものだったのかという疑念を、どうしても払いのけることができないのである。やはり婚約破棄の本当の理由は別のところにあったと見るべきである。

私は、最大の原因は宗教問題、すなわち彼の神信仰にあったと思う。また信仰の問題と結びついてはじめて、彼の挙げた「悔悟者」、「従前の経歴」、「憂愁」などの原因も、重大な、最愛の女性とも別れざるをえないほどの意味を帯びてくると考えられるのである。

彼は日誌(五二年九月十日付)に次のように書いている。

「それゆえにこそ、今日もまた事がつまく運ばれてゆくことが私に深い感銘を与えた。そのことよって私がつくづくとあざやかに思い起こしたことは、彼女がやはり私の人生において第一の優位を占めているわけではないということだった。否、否、人間的に言えば——しかし、確かにそれを言い表すことは私にはどんなにかうれしいこと

なのだが、彼女こそ唯一の、そして第一の優位を私の人生において占めてきたし、占めるであろうが——しかし、神が第一の優位を占めているのだ。彼女との婚約とその破棄は、本来的には私の神関係であり、あえて言えば、神的な意味で神と私との婚約なのだ。」(Pap. X 5 A 21)

この文章の書かれた九月十日という日付は彼にとって特別の意味を持っていた。彼がレギーネから結婚の承諾を得たのは、十二年前の九月十日のことだったからである。

彼がレギーネを心の底から愛していたことは疑う余地がない。人間的な関係に限って言えば、当然のことながら、彼にとってはレギーネこそ第一の優位を占める存在だったのである。

しかし彼にはもう一つの世界、神とかわる宗教的世界があつたのだ。しかも重要なことは、彼にとってこの二つの世界が、常人の場合のように、簡単に和解できるようなものではなく、一方を選択すれば他方を放棄せざるをえない、非和解的な性質なものだったことである。

彼は二つの世界の葛藤に苦しみ抜いた末に、レギーネよりも神関係を優先する。つまり彼は、宗教的世界(神の国)に生きることを決意して、レギーネとの結婚を断念する。それを彼は「神的な意味での神と私との婚約」と表現したのである。

レギーネを含めて、世間一般の人々は、彼の婚約破棄の理由がまったく理解できなかった。これはある意味で仕方ないことだったと言わねばならない。一般の人々、つまりキエルケゴールの用語で言えば、審美的領域や、せいぜい倫理的領域にいる人間にとっては、世俗的世界の道徳や規範が唯一のものであり、宗教的世界が一人の人間にこれほどの意味を持つてゐることは想像さえできないことだからである。

三、間接伝達への道

キエルケゴールにとって、問題の核心を世間が理解しないのは、仕方のないことであつた。しかし、彼はレギーネだけには何とか真実を伝えようとした。これは宗教的世界の事柄を世俗的（審美的）世界の言葉に翻訳して彼女に伝えようとする壮絶な試みであつたとも言える。

たとえば彼の一連の審美的著作と呼ばれる作品の隠されたテーマは、宗教的な理由で結婚を断念せざるをえなかつた彼の苦悩を彼女に伝えようとしたものである。しかし結局のところ、彼のこの試みは挫折せざるをえなかつた。二つの世界は、本質的な意味で異なる世界、お互いに隔絶された世界だからである。なんとという苦悩の世界であろうか。彼は心から彼女を愛しながら、婚約破棄の本当の理由を彼女に伝えることができなかったのだ。

彼が、彼女の夫フリッツ・スレーゲルを通して彼女に書き送つた手紙（未開封のまま返送される）にも、二つの世界に引き裂かれながら苦悩する彼の姿をかいま見ることができる。

「私は残酷だつた。それは本当だ。何故だろうか？ 実際お前は知らないのだ。私は

沈黙を守つてきた。それは確かな事だ。私が何を耐え忍んできたかは神のみが知り給

う——願わくは、お前に話すのが今ですら早過ぎないように！」（大谷長訳編、『婚約

——セーレン・キエルケゴールの遺稿』、創言社、一四一頁）

彼の「私は残酷だつた」との言葉は、彼が婚約破棄に際して、レギーネに一連の残酷な態度をとらざるをえなかつたことを言っているのである。彼は、宗教的な理由を彼女に理解させることが不可能である以上、徹底的に悪党として振る舞つて、残酷に相手突き放すことこそ最善の道だと

考えたのだ。またそれは、彼によれば、女性に対する最高の礼儀でもあったのである。

それから彼は「何故だろうか？」と問いかけながら、それに答えていない。それは、二つの世界の質的差異のために、レギーネには説明しえないことだったからである。

彼の苦悩は、審美的世界の人間には理解してもらえない性質のものであったのだ。「私が何を耐え忍んできたかは神のみが知り給う」との彼の言葉は、二つの世界の質的差異の前で立ちつくして、苦悩する彼の心情を吐露したものである。

しかし彼は、いつかは真実を彼女にわかしてもらえないのではいかとの期待を捨ててはいない。それが彼の死ぬ間際のことなのか、それとも死後のことなのか、彼にはわからなかった。しかし彼は、当面はおそらく無理だと思っていたのである。「願わくは、お前に話すのが今ですら早過ぎないように」との言葉は、最後には真実をわかってほしい、しかし今はまだ時期尚早で、おそらくわかっただけでもえまい、との、期待とあきらめの交錯した心情を言い表したものである。

彼は、レギーネに対する身を引き裂かれるような苦悩の体験のなかから、「間接伝達」の思想を発展させてゆく。つまり彼は、直接的な方法では、質的に異なる世界に住む相手に真実を伝えることはできないこと、伝達は間接的な仕方、言わば相手を真理のなかへ欺き入れるような仕方である。されなければならないことをつかみ取っていたのである。

四、間接伝達と神のインコグニト

キエルケゴールが間接伝達の思想を学んだのはレギーネとの関係からであった。

彼は日誌に次のように書いている。

「私は、自分が宗教的著作家である、と言いたくて仕方がなかった。しかしなんとかして彼女を助けようと、私が悪党であるとの欺きを設定したあとで、どうしてそんなことが言えるだろうか。本当は、私に間接伝達を覚えてくれたのは、彼女、すなわち彼女に対する私の関係である。」(Pap. X3 A 413 S.286)

彼はレギーネに、本当は自分が宗教的著作家であり、宗教的な理由で結婚できないのだと、真実を直接的に語りたくて仕方がなかったのだ。しかしこれは、すでに述べたように、審美的世界にいる彼女に真実を伝える方法となりえないことは明らかであったし、彼女を自由にして、他の男性と結婚するように仕向けるためにも絶対にはならないことであった。

だから彼は別の方法で、すなわち自分が悪党であるとの欺きを設定するという回り道を取りながら、なんとか彼女に真実を伝えようとしたのである。彼が彼女から、すなわち彼女に対する関係から、間接伝達を教えられたと言っているのは、このためなのである。

審美的世界のレギーネに、それとは隔絶した宗教的世界の事柄を伝達しようとする苦悩から生まれた間接伝達の思想は、ついには彼のキリスト教解釈の重要な柱となってゆく。

彼は、キリストの本質的な在り方を、インコグニト (Incognito) という概念で表す。そしてインコグニトと間接伝達は、彼のキリスト教解釈のなかで、密接に関連づけられるようになる。

インコグニトとは、外見からではその人を識別することができないこと、すなわち「微行」、「微服」の意味であるが、キエルケゴールはこれを、神の子でありながら人間としてこの世に現れた

神・人たるキリストを本質的に規定するものとしたのである。

彼は一八四三年には、すでに日誌に次のように書いている。

「天にいます神が、自分のインコグニトを保ちつづけることが許されている唯一の者であるということのうちには、何かしら奇妙に悲劇的であり、喜劇的であるようなものがある。」(Pap. IV A 125)

あらゆる瞬間にインコグニトを貫徹すること、すなわち自分の本来の姿とは別の姿をとりつづけて、それを最後まで貫き通すことは、普通の人間には不可能であろう。キエルケゴールは、神・人としてのキリストだけが、最後までインコグニトを保ちつづけることが許されている存在だと考える。また彼は、人間とは隔絶したそのような神の在り方のなかに、悲劇的なものと喜劇的なものを同時に見ているのである。

キリストの本質がインコグニトだという考えは、キエルケゴールの内部で次第に揺るぎのない確信に変わってゆく。

次の文章は、一八四八年の日誌の一節である。

「それゆえ人々は、一般的に、決して卑賤の姿のキリストのイメージを持ちつづけることができない。なぜなら人は、普通の人間とは別の者と見せかけることが何を意味するかは……たんに思い描くことさえできないからである。そこで人々はみな、基本的に想像している、もし自分たちがキリストと同時代に生きていたとすれば、自分たちは十分に何事かをかいま見たであろう」と。他方で人々は、インコグニトを貫徹する

ために必要な自己否定についても、たんに思い描くことさえできない。実は、キリストが口を閉ざして語らないものだということを、正しく信用していかないのである。それゆえ人々は、キリストがサタンでさえ見抜くことができなかつたインコグニトにおいて、細部に至るまで、軽蔑された人間以上でも以下でもないものになることができ、たということを感じる。まさにキリストに栄誉を与えることになるということに気づかないのである。」(Pap. IX A 151)

ここには幾つかの、キエルケゴールのキリスト教理解の核心となる思想が含まれている。

まずキリストの卑賤の姿は、神の徹底した自己否定の姿、すなわちインコグニトだということである。神は人間に対する愛から、人間と同じ立場に立つとして、人間の姿を、しかも最も賤しい人間の姿をとったのだ。だからキリストは、自分の真の姿を直接的に現す可能性を持たない。したがって、もしも同時代人がそのような存在を目のあたりに見たとしても、ほとんどの場合、それが神だとはわからなかつたはずなのである。

では、キリストを神として見ることは、どのようにして可能なのか。

それは、キエルケゴールによれば、キリストの同時代人にとっても現代人にとっても、等しく信仰によってのみ可能となる。そしてインコグニトのなかにあるキリストを信じるからこそ真の信仰であり、キリストに栄誉を与えるものだ、ということである。

ここで述べられている、神のインコグニトに関する思想は、『キリスト教への修練』(第一部、「躓きの思想的規定」SV 16, S. 121-139)で一層深化した形で展開されている。

彼はキリストについて次のように言う。

「そしていまや、教師「キリスト」が教えから分離されえないもので、しかも教えよりも一層本質的なものであり、一つの逆説であるとすれば、一切の直接伝達は不可能なのである。」(SV 16, S. 121)

キエルケゴールはここで、キリストの教師としての「存在」のほうに、その「教え」よりも一層本質的なものと主張している。しかもその存在は、神・人、つまり神でありながら人間でもあるという絶対的矛盾、すなわち逆説なのである。

そうだとすれば、キリストにとって、何事かを直接的に伝えることは不可能だということになるであろう。自己矛盾したものは、自分を直接的に伝達することはできないからである。また人間にとって、その教えは直接的に受け取ることのできないものだということにもなる。キリストの伝達は、本質的な意味で間接伝達なのである。

キエルケゴールはさらに「神・人は『しるし』(Tegn)である」(SV 16, S. 122)という命題を掲げている。

では「しるし」とは何か。

「しるしとは否定された直接性、あるいは第一の存在とは異なる存在である。」(SV 16, S. 122)

キエルケゴールはしるしの実例として「航路標識」を挙げている。それは、直接的な存在としては、杭や灯火などであるが、それがしるしであるということは、その直接的な存在「第一の存在」が否定されて、別のもの（航路の安全を確保するための道具）となっていることを意味している。

したがって「神・人はしるしである」とは次のことを意味することになる。キリストは直接的存在としては人間、しかも賤しい姿の人間である。しかし彼はしるしとして、その直接的存在の否定であり、それとは別のもの（神）であることを意味しているのである。

しるしには、さらに次のような側面もある。

「というも、しるしは、それがしるしであることを知っている者にとってのみ、そして最も厳密な意味では、それが何を意味するのかを知っている者にとってのみ存在するからである。それ以外のすべての者にとっては、しるしは直接的に存在するものである。」(SV16, S.122)

ここで言われていることを、神・人に関することとして言い換えれば、次のようになるであろう。

神・人は、それが神・人であることを知っている者にとってのみ、すなわちそれを信仰によって受け取る者にとってのみ存在する。それ以外のすべての者にとっては、神・人は直接的に存在するもの、卑賤な人間にすぎないということである。

神・人はさらに「矛盾のしるし (Modsigelsens Tegn)」と規定される。

『矛盾のしるし』とは、矛盾を己の内に含んでいるしるしのことである。直接的にこれこれであるものが、同時にしるしであるといふことのなかには全く矛盾はない。…それに対して矛盾のしるしは、それを構成しているものなかに矛盾を含むしるしなのである。」(SV 16, S. 122-3)

先に実例として挙げられていた航路標識は、直接的存在としては杭や灯火であるが、同時に、直接的存在の否定、すなわち第一の存在とは異なる存在としては航路の安全を確保するための道具で

もある。このことななかに矛盾はない。しかし神・人は矛盾を、すなわち永遠なる存在としての神でありながら、同時に時間的存在としての人間でもあるという意味での矛盾を己れの内に含むしただというのである。

神（キリスト）が矛盾のしるしであり、インコグニトがその本質だとすれば、神にとって直接伝達が不可能なことは明らかであろう。キエルケゴールは次のように言う。

「識別不可能性 (Kjendelighed) に関しては、あるいは識別不可能性のなかにいる者にとっては、直接伝達は不可能なのだ。というのも、直接伝達とは人の本質的な在り方を、もちろん直接的に述べるものだからである。——しかし識別不可能性とは、人の本質的な在り方となっているその性格のなかにいないということなのだ。したがってここには直接伝達を、それでもなお非直接伝達にしてしまう矛盾、つまり直接伝達を不可能にしてしまう矛盾が存在するのである。」 (SV16, S.129)

インコグニトここでは「識別不可能性」と言い換えられている。キエルケゴールによれば、識別不可能性とは、ある者がその本質のなかにいないということ、つまり存在と本質とが矛盾しているということである。このような者にとって、直接伝達が不可能なことは自明であろう。直接伝達とは、本質的な在り方を直接的に伝えるものだからである。

また、直接伝達がなされた場合には、それは伝達を受け取る者に直接的に理解できるものである。そして伝達自体も、本来直接的に理解されることを求めているのである。

しかし神・人が識別不可能性のなかにあり、直接伝達が不可能だとすれば、神・人の伝達はそれ

を受け取る者に、直接的な理解とは全く違つものを求めていることになる。

「伝達は伝達者によつて矛盾を含むものとなり、それは間接伝達となる。それは君に、君が彼を信仰するか否かの選択を突きつけるのである。」(SV 16, S. 131)

神・人の間接伝達は、それを受け取る者に信仰か否かの選択を求めるのである。しかしまたここに、伝達の受け手である人間が、信仰に至らずに躓いてしまふ可能性が本質的な意味で存在する。大谷長氏の言うように、『キエルケゴールに於ける授受の弁証法』、東方出版、九十七頁) 矛盾のしるし(神・人)は躓きの可能性であり、その最大の可能性であるがゆえに、最大の(唯一の)信仰の可能性だとも言えるのである。

キエルケゴールにとつて、矛盾のしるしとしての神の姿は、本当の姿を決して現すことのできない苦悩する神の姿でもある。そして葛藤する神についての叙述には、時としてレギーネ問題で苦悩するキエルケゴール自身の姿が投影されている。

「葛藤というのは、他の人間に対する愛情から自分の内面性を隠して、別人のように見せかけねばならないことなのだ。その苦痛はもっぱら魂の苦痛であり、あらん限りの複合的なものである。」(SV 16, S. 133)

キエルケゴールは、キリストが神でありながら同時に人間でもあるという絶対的な矛盾、つまり自分の本性を常に隠して別人のように見せかけねばならないという魂の苦痛の真ただ中であつたと言つのである。

ここで言われている神の魂の苦痛は、レギーネに対するキエルケゴールの内面の苦痛そのものである。彼は、レギーネに対する愛情から、自分の内面性を隠して別人のように見せかけ、悪党として振る舞わねばならなかったのである。

彼はさらに、苦悩する神の愛（苦悩するキエルケゴール自身の愛でもある）について次のように言う。

「第一は他者のための苦悩である。というのも、愛の気遣いであるもの、すなわち他者のために一切を行ない、生命を犠牲にしようとする愛が、ここでは最も高度な種類の残酷さと恐るべき類似性を持つあるもののなかにその表現を見いだしているからである。——ああ、だがそれが愛なのだ。」(SV 16, S. 133)

神（キリスト）の自己犠牲的な愛、つまり人間の罪を贖うために己れの生命を犠牲にしようとする愛は、インコグニト、すなわち識別不可能な姿をとって人間を突き放そうとする残酷な形態をとらざるをえないというのである。これは矛盾のしるしである神にとっては避けられないことなのだ。そして同時にこれは、残酷にもレギーネを突き放さざるをえなかったキエルケゴール自身の愛の姿でもある。

神の愛がこのように自己矛盾したものであり、またそれこそが神の「真剣さ」(Alte)、「だとすれば、偶像崇拜のように、神に直接的な識別可能性（直接伝達）を求めることは、神に「緩和」を要求することにほかならない。

キエルケゴールは次のように言う。

「さて神・人だ！ 真の神は、直接的に識別可能になることはできない。しかし直接的な識別可能性は、たんに人間的なものが、すなわち人間が——その人間のもとに彼〔神〕は来臨したのだ——言語に絶する緩和として彼に乞い願お、うとしたものなのだ。そして愛から彼は人間となる！ 彼は愛である。だが彼は、彼が現存するあらゆる瞬間に、一切の人間的な同情と配慮を、言わば十字架につけねばならぬ。——というのも、彼は信仰の対象となることしかできないからである。」(SV 16, S. 133)

キリストは神・人であり、矛盾のしるしであるがゆえに、直接的に識別可能な姿であってほしいという人間の「緩和」への望みを、またその望みに応えようとする人間的な配慮を十字架につけねばならないというのである。

直接伝達を拒否するこのような厳しさこそ、キエルケゴールによれば、神の「真剣さ」であり、神の愛の真の姿なのである。

〔本稿は、すでに発表済みの二つの拙論、「キエルケゴールとレギーネ」、「キエルケゴールにおける『間接伝達』」の、レギーネと間接伝達の部分に焦点を当てて、二〇〇一年、キエルケゴール協会の春期講演会で発表したものを、さらに加筆、書き直したものである。拙著『苦悩と愛——キエルケゴール論』(二〇〇〇年三月、創言社、三丁六〇頁)参照。〕

注

- (一)SV = *Søren Kierkegaard Samlede Værker*, udg. af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, Gyldendal, 1962-64 [全集 全11巻]
Pap. = *Søren Kierkegaards Papirer*, Anden forrede Udgave ved Niels Thulstrup, Gyldendal.